Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P-490 母体末梢血中の胎児ヘモグロビン（HbF）γ鎖 mRNA の動態（異常妊娠症例での検討）

京都府立医大
奥田知宏，田村尚也，加藤稚佳子，木下由之，小島秀規，本庄英雄

【目的】母体末梢血中での胎児ヘモグロビン（HbF）鎖 γmRNA は妊娠6週以降増加し10週で最初の peak を形成した後15週頃まで減少する．その後，緩やかに増加し，分娩発来3-4週間前より有意に再上昇し，分娩直前に最高発現レベルに達し，産褥期にはすみやかに減少することを我々は報告してきた．今回，胎盤血管床の破綻を伴う異常分娩のマーカーとなりえるかどうかについて検討した．【方法】患者同意のもと末梢血より total RNA を調製し（妊婦；650名，褥婦；55名，非妊婦；90名）定量的 RT-PCR 法にて，HbF-γ copies/βactin copies（H/A 比）を算出し，正常分娩，異常分娩を比較検討した．【成績】妊娠中期（15週—30週）の正常妊娠 H/A 比は1.21×10^{-3}であったが，早産に至った22症例では，分娩前より長期に渡り正常変動域を逸脱する持続的高値を認めた．一方 tocolysis 可能な切迫早産症例（18症例）の発現量はほぼ正常範囲内であった．絨毛羊膜炎をきたし早産となった6症例では正常妊娠の100-10000倍もの高値を示した．胎盤早期剥離3症例，前置胎盤7症例（うち癒着胎盤2症例）においても H/A 比は異常高値を示し，とくに胎盤早期剥離，癒着胎盤においては，100-1000倍の高値を示した．一方 IUGR を伴う妊娠中毒症10症例は，ほぼ正常変動域内での推移であった．【結論】H/A 比の測定は胎盤血管床の破綻をともなう可能性のある異常分娩（早産，絨毛羊膜炎，胎盤早期剥離，癒着胎盤）の予知マーカーあるいは予後判定の指標として利用できる可能性が示唆された．

P-491 妊娠母体末梢血球におけるサイトカイン（IL4, IL8,IL18）mRNA 発現について

京都府立医大
加藤稚佳子，田村尚也，奥田知宏，小島秀規，木下由之，本庄英雄

【目的】我々は，母体末梢血球中での IL-4,IL-8,IL-18の産生について mRNA レベルにて測定し，正常妊婦での変動について明らかにしてきた．今回，母体末梢血球中での IL-4, -8, -18 mRNA 産生について母体末梢血中に流入してくる胎児抗原量（HbF-γ chain mRNA）との関連について早産をもふくめて検討した．【方法】患者同意のもと採血を行い（非妊婦100例，妊婦544例（妊娠4w～41w），早産（妊娠22W～36W 分娩）15例），total RNA を調製し，定量的 RT-PCR 法にて，目的遺伝子（IL-4, -8, -18）copies/βactin copies 比にて検討した．【成績】IL4mRNA は非妊婦に対し妊娠3カ月から10カ月で高値を示した．（$P<0.05$）．IL-8, -18 mRNA は，妊娠と共に発現量が低下し，妊娠中期では非妊婦に比べ共に有意に低値を示すが（$p<0.05$），その後徐々に増加し IL-8 mRNA は分娩1週前に妊娠期間中での最高発現量に達し，IL-18 mRNA は分娩3～5週前に最高発現量に達した．早産症例についても分娩日より後方視的に検討すると，同様の傾向を認めた．HbF-γ mRNA 発現量との関係では IL-8,IL-18mRNA との間に正の相関を認めた．【結論】妊娠による母体免疫系の変化に，母体血中に流入する胎児抗原量との間に関連をもつ系（IL-8, IL-18）と関連性を示さない系（IL-4）が存在することが明らかとなった．関連性を示す系は早産をも含めて分娩直前に変動することが明らかとなった．

P-492 地域における産科診療と医療連携

東京都立荏原病院
小林信一，渡邊衣里，鈴木純子，斉藤　一，豊泉孝夫，平野孝幸，前田光士，大屋　敦

【目的】出生率の低下などに伴い東京都区部では分娩を取り扱う施設の減少が顕著であり，またハイリスク妊娠の増加により周産期医療システムの再編成や整備が推進されている．一方地域の診療体制の充実を目的とした医療連携が推進され，中核となる診療施設の役割がより重要となり，所属する地域についての産科診療におけるこの分野での現状と今後の展望について検討した．【方法】1994年の開院時より外来および入院患者の統計により外来数，分娩数を紹介地域により分別し，その年次推移について検討した．紹介症例については所属医師会と医療連携を提携している周辺7医師会と他の地域とを区別した．また有床あるいは無床の施設との医療連携の現状と総合周産期医療センターとの母体あるいは新生児搬送の現状についても検討した．【成績】1999年度における産婦人科の外来数（初診）は約2400例，入院数は1500例で前年度比約3%の増加であった．この中で産科関連の入院は1241例，分娩数は998例で約40%が紹介例であり，所属する地域の医師会からの紹介例は27.5%，周辺の医師会からは39.3%と前年度と比較すると次第に紹介を受ける地域の拡大が確認された．また地域への逆紹介は34例，母体新生児搬送は15例であった．【結論】産科診療における医療連携は，東京都区部などの都市部では分娩施設の減少などによりその必要性が高まっているが，地域における基本となるシステムの構築には諸問題が解決されずに充分な体制が整っていない．また診療だけではなく，母子保健としての教育の分野や啓蒙活動などについての要望も高く，包括的な地域医療に貢献する医療体制の確立が期待されているものと考えられた．

NII-Electronic Library Service